

平成 23 年度 弥生小学校 研究の概要

1. 研究主題

かかわり合い、自己の学びを深める子

2. 研究副題

「ことば」の力を大切にした社会的な思考力の育成

3. 研究主題・副題設定の理由

21世紀は「知識基盤社会」の時代であり、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域で活動の基盤として飛躍的に重要性を増すといわれている。グローバル化が進む中、競争と技術革新が絶え間なく生まれ、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断力が求められている。また、社会に目を転じてみれば、自己中心的で、他者を思いやることが希薄になり、集団の中で他者とのかかわりができない子どもたちが増えつつある。そんな中で、子どもたちの社会性や公共心、規範意識や公正な判断力など「公意識」が欠如し、社会に対するかかわり方や付き合い方に課題が見られるようになっている。

こうした時代にあって本校では、これまでコミュニケーション力の育成に力を注いできた。研究を積み重ねることで、子どもたちの姿や教師の絶対評価による数値の変容などから、その成果を感じ取ることができた。しかし、「互いの考え方を交流し合い、集団の中で思考を練り上げたり、自分の考えを深めたりしていくという姿はまだ弱い」という課題が残った。

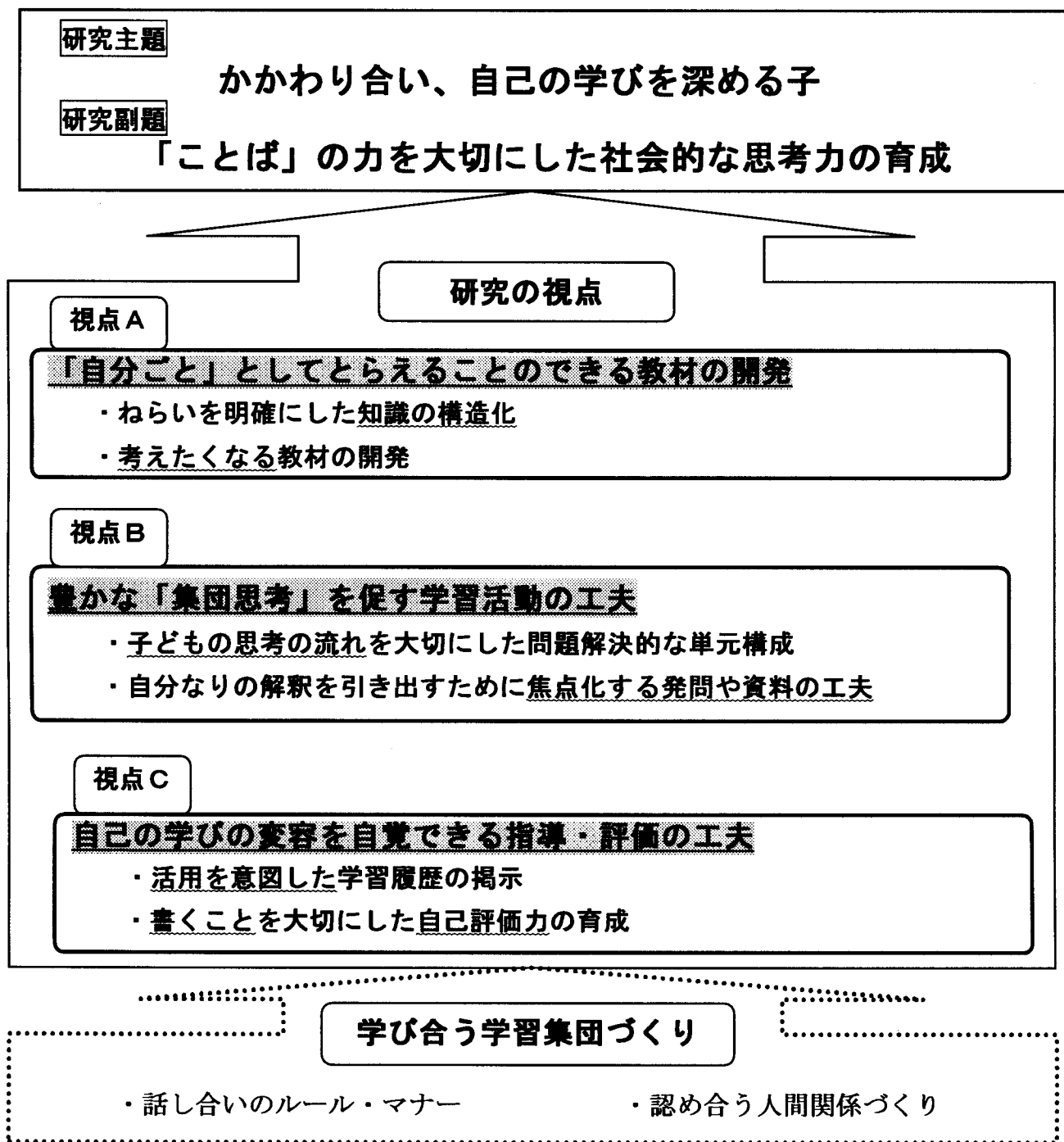
そこで、社会科や生活科を中心に、自ら進んで「かかわり合い、自己の学びを深める子」の育成を図っていきたく願い本研究主題を設定した。ここでいう「学び」とは、様々な社会的事象や自然、人や社会、内面の自分（自己）などとの出会いであり、それらとのかかわりの中から自らの思考を吟味し、再構築していくことであると捉えている。一時間一時間の学びの中では小さな変容であったとしても、それが積み重ねられていくことで、社会に対する知識・理解が深まり、社会的なものの見方や考え方が深まり、やがては社会とのかかわり方や自己の生き方を追求していく力へとつながっていくことを願っている。つまり、こうした学びの深まりが大会主題である「自ら社会に参画する力の基礎を養う」ことにもつながっていくと考えている。

こうした学びを成立させるためには、考えのもとになる知識をきちんと身につけさせることが大切であるとともに、身につけた知識を活用し、集団で練り上げることで新たな考えを生み出すような集団思考の場を意図的に設けていくことが大切である。そこで、上記のように研究副題を設定し、子どもの思いを大切にしながら、集団思考を通して社会的な思考力の育成を図っていくこととした。学級は小さな社会であり、子どもたちは集団思考を通して、①違う意見を尊重する、②よい意見を生かす、③困っていたら助けるなど、人間として生きていく上で大切なことを学んでいくのである。つまり、「学び合い」を通して共生していく社会人を育てていくのであり、その点においても大会主題である「自ら社会に参画する力の基礎を養う」ことにつながっていくと考える。

4. 研究の基本方針

- ① 学校研究を教育目標到達のための、学校運営上の大きな手だてのひとつと捉え、全教職員が共通理解を図りながら、学校生活全般において、共通実践を進めていく。
- ② 本年度の学校研究の研究領域としては、生活科・社会科を中心に教科等の学習の領域に絞って研究を推進していく。
- ③ 本校が考える「学力」を子どもに培っていくために、学習指導要領に示された教科等の観点をもとにした基礎・基本的な内容をふまえながら、「問題解決力」を支える「思考力」の育成に努めていく。
- ④ 「弥生プラン」(教育課程)のさらなる整備・充実に力を注ぎ、各教科、道徳、総合的な学習や、図書、情報教育等の全体計画と、評価計画とに基づいた実践研究を行なっていく。

5. 研究の全体構造図

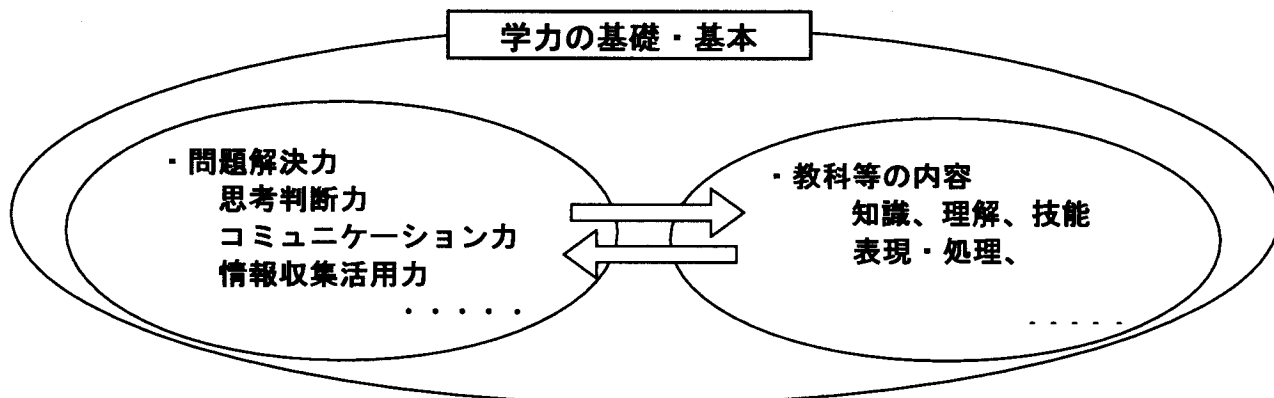


6. 研究の仮説

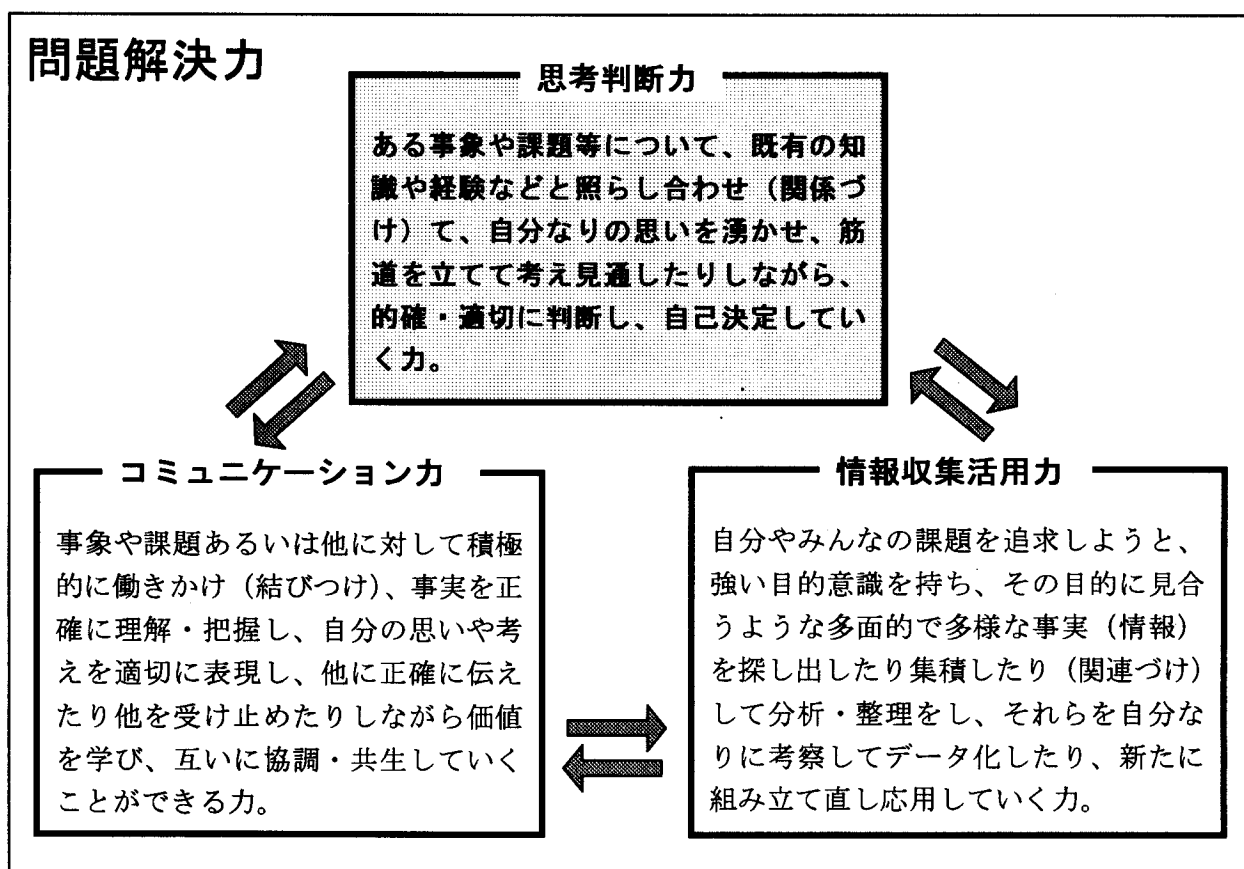
社会的事象に大きな関心や強い問題意識を持ち、自分なりの解釈や意味づけを集団で練り上げていく学習を積み重ねれば、社会的なものの見方や感じ方に支えられた思考力が育つであろう。また、自己の学びを見つめる自己評価力を育成していくことで、この社会的な思考力をより確かなものにすることができ、豊かなかかわり合いの中で、自己の学びを深めることができるであろう。

7. 学力のとらえと子どもにつけたい力

本校では、学力の基礎・基本を、知識、理解、技能などの内容的なものにのみ限定して捉えてはいない。学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力なども含めて学力の基礎・基本として捉えている。また、よりよく問題解決しようとする資質・能力も学力の重要な基礎・基本にあたると考えている。これらの力は学習を進めるにあたって機能として働き、子どもの確かな学力の定着のために重要な意味を持つと考えている。本校の研究主題「かかわり合い 自己の学びを深める子」の育成を考えたとき、学力の内容的な部分と機能的な部分とを一体としてみていくことの必要性を感じている。本校の学力の基礎・基本の捉えは以下のようなになる。

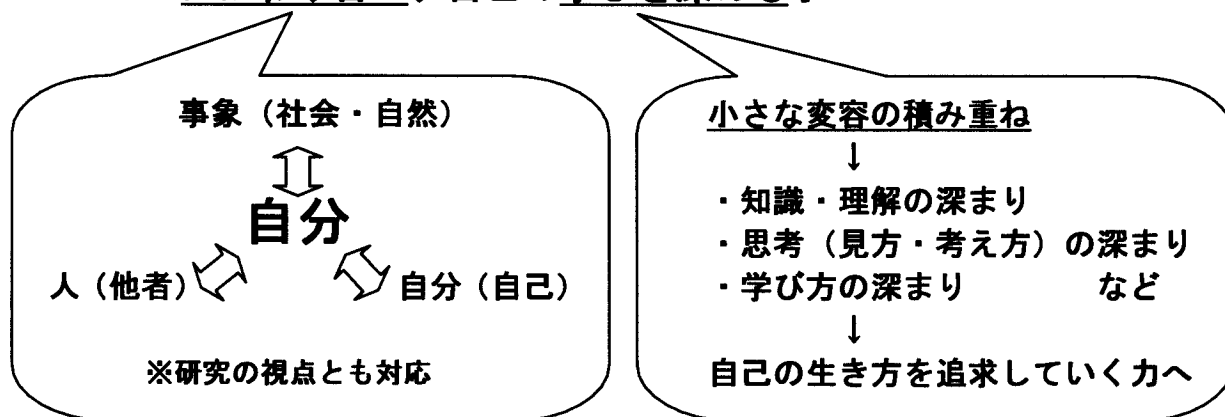


今日、さまざまな困難や問題と直面したときに、自己のあらゆる能力を使って、その困難や問題をよりよく解決していく力が必要とされる。確かな問題解決力をつけるためには、その要素となるさまざまな力が必要であり、本来子どもは、さまざまな問題解決の力を併せ持っているものと考えている。本校では、子どもの実態を踏まえ、その中でも「思考判断力」、「コミュニケーション力」、「情報収集活用力」を重点的に伸ばしたいと考え、つけたい力として位置づけた。問題解決力としての「思考判断力」、「コミュニケーション力」、「情報収集活用力」の関係を以下に示す。



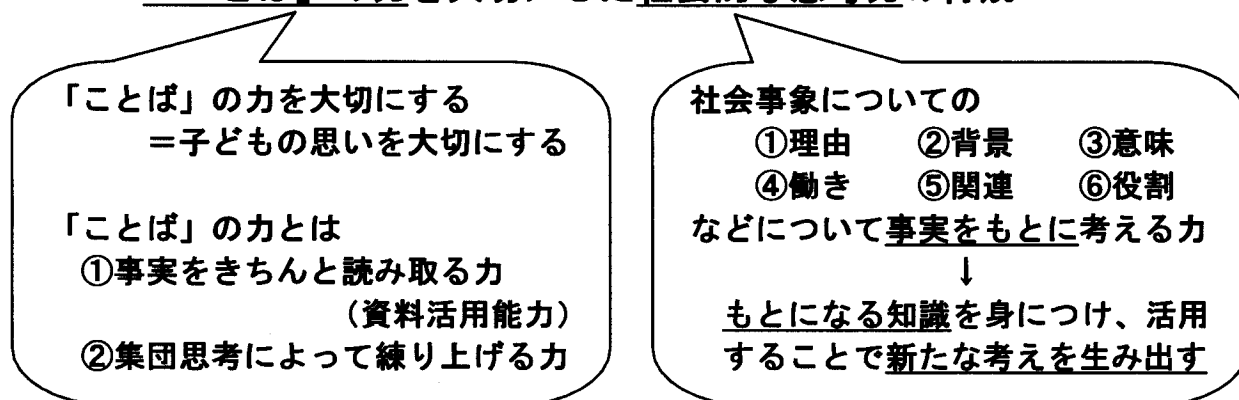
8. 研究主題のとらえ

かかわり合い、自己の学びを深める子



9. 研究副題のとらえ

「ことば」の力を大切にした社会的な思考力の育成



10. 研究の視点について

昨年度までの研究成果と課題をふまえ、研究主題「かかわり合い、自己の学びを深める子」に迫るために、『「ことば」の力を大切にした社会的な思考力の育成』を研究副題として設定した。これまで培ってきた「コミュニケーション力」を土台として、生活科や社会科の中で、「問題解決力」を支える「思考力」をさらに伸ばしていきたいと考えたのである。そして、次の3点を研究の視点として手だてを具体化し、実践・研究を行うこととした。

研究の視点	
視点A	「自分ごと」としてとらえることのできる教材の開発
視点B	豊かな「集団思考」を促す学習活動の工夫
視点C	自己の学びの変容を自覚できる指導・評価の工夫

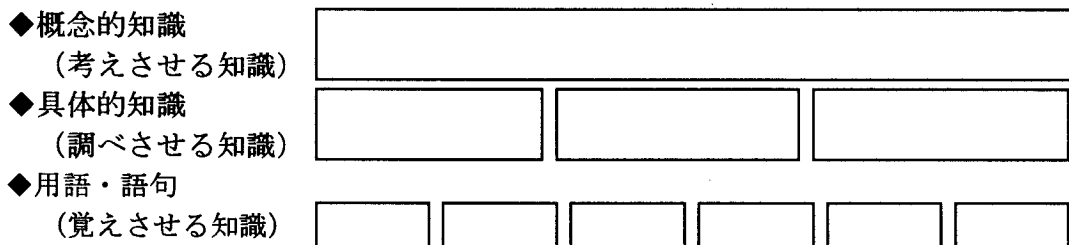
(1) 視点A 「自分ごと」としてとらえることのできる教材の開発 について

子どもたちに思考力を育成するためには、子どもたちが強い問題意識を持ち、「自分ごと」として考えたい教材の開発が不可欠である。馬を川岸まで連れて行っても無理やり水を飲まることができないのと同様に、考えるのは子どもたち自身である。子どもたちの主体的な学習活動なくして、思考力の育成は考えられないのである。その意味では、「教材を子どもたちにどのように近づけるのか」という手だてがとても大切になると考える。

社会科や生活科においては、身近な地域や自分の生活とのかかわり合いが見られる教材を開発することで、自分のこととして学んだり、自ら問いかけながら学んだり、学んだことを実生活に生かしたりすることができると思う。そのような教材の中でも、子どもたちが思わず「何?」「なぜ?」「どうして?」と問いかけたり、考えたりしたくなるような教材との出会いを大切にしたい。子どもたちが、自分の生活経験や既習と関連づけながら知的好奇心を高め、問題意識をもつことのできるような教材の開発に努めていきたいと考えている。

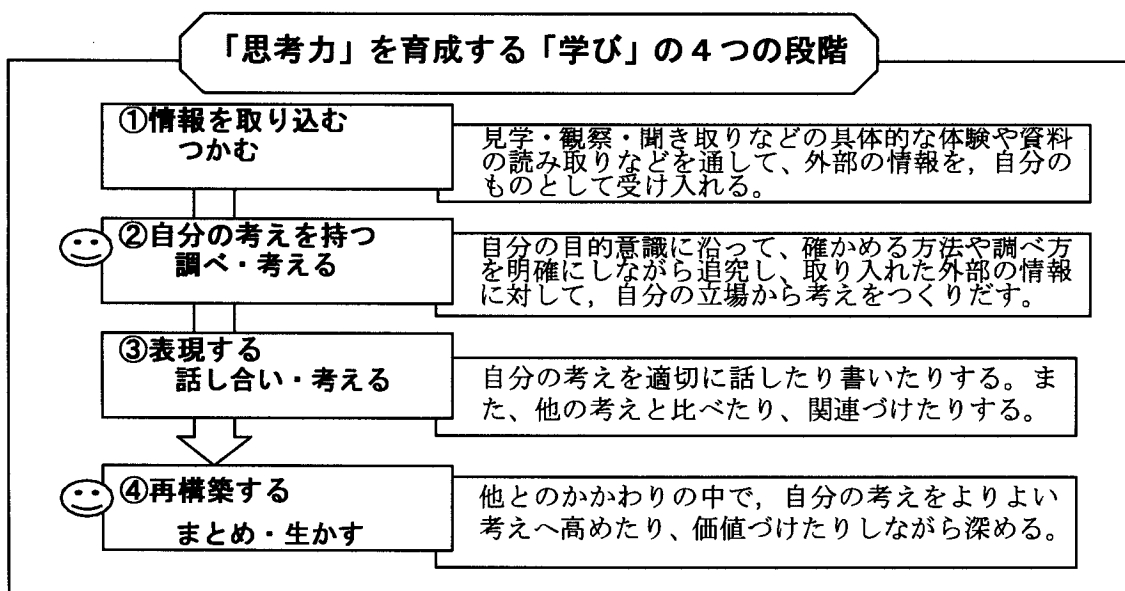
もちろん、子どもたちの知的好奇心をくすぐれば何でも良いというわけではない。獲得させたい社会の中のかかわり合いが明確である教材の開発をすることは言うまでもないことであろう。そのためにも、単元のねらいやそこでつけたいものの見方や考え方を明確にし、ゴールの子どもたちの姿を具体的にイメージすることで、何を調べ（事実認識）、何を考え（社会認識）させていくのかをはっきりさせることも教材開発の大切なポイントであると考えている。

そこで、今年度は「知識の構造図」を作成し、知識・概念を明確化することで、何を調べさせ、何を考えさせるのか、それぞれの活動の意図を明確にしていく。その際、知識を以下のような3層で整理しながら構造化していきたい。



(2) 視点B 豊かな「集団思考」を促す学習活動の工夫 について

これまで、思考と表現の一体化を図りながら、「思考力」の育成を図るために、「学び」を以下のように4つの段階でとらえ、手だてを具体化してきた。



子どもの「学び」をこうした4つの段階でとらえ、再構築を意識した「考える場」を意図的に設定するとともに、「集団思考の場でどう深めるか」という手だてを大切にしていきたいと考える。そのためには、子どもたちの自分なりの解釈や意味づけを引き出すような学習活動の工夫が大切であると考え。どのような場で、どのような体験的な活動や言語活動に取り組みさせることが、子どもたちの思いを引き出すことにつながるのかを明確にしていきたいと考える。その際、子どもの思考の流れを大切に課題の連続性を意識しながら単元の構成にあたりたい。

本時の学習においては、子どもたちの自分なりの解釈を引き出すために、焦点化する発問や資料の提示を工夫していく。どのような発問・資料で、何に焦点化することで、自分なりの思いや解釈を引き出し、ねらいに迫ることができるのかを明確にしておくのである。

また、「根拠は～」、「わけは～」と根拠や筋道を明確に表現したり、「たとえば」、「つまり」などを使って相手を説得できるように表現したりするなど、集団思考を練り上げていくのに必要な適切な表現の仕方についてもしっかりと力をつけることを大切にしていく。

さらに、板書計画を丁寧に行い、板書を構造化することで考えを整理したり、論点を明確にしたりすることを通して集団思考を促していきたい。

このような教師の意図的な仕掛け（手だての工夫）によって集団思考を深め、「わかったつもり」から「わかった」へと導いていきたいと考える。

(3) 視点C 自己の学びの変容を自覚できる指導・評価の工夫 について

これまで、自己の学びの深まりへの気づきを促すために、「書く」ことを大切にしてきた。前述の「学び」の4つの段階の中で、②考えを持つ段階では、「考えをつくるために書く」ことを、④再構築する段階では「理解をつくるために書く」ことを大切にしてきた。その際、その時間のキーワードとして社会科の用語を活用するという意識も意識してきた。

そして、昨年度はさらに一歩踏み込んで、子どもたちが自己の学びの変容を自覚できるように、自己評価力を育成するための指導・評価の工夫を意識して実践にあたってきた。具体的には、次の3点の取り組みである。

- | |
|---|
| <p>① 2つの「書く」（考えをつくるために「書く」、理解をつくるために「書く」）場の工夫と時間の保障</p> <p>② 3つのポイントを意識した「ふり返り」の積み上げ</p> <ul style="list-style-type: none">・本時のめあてにそったまとめ<ul style="list-style-type: none">→ 解決したこと・解決できなかったこと・さらに追求すること・自分の考えの変容について書く → はじめの自分の考えと比べて・だれのどのような考えやどんな資料によって考えが変わったのかを書く <p>③ 変容に気づかせる評価と良さを広める評価</p> <ul style="list-style-type: none">→ 見方が育ったこと、キーワードを獲得したことなど |
|---|

こうした取り組みを通して、子ども一人一人の思いやものの見方・考え方を把握したり、思考の流れや学習状況を正確に把握したりすることを大切にし、さらに子どもの実態に応じた指導を行っていききたいと考える。

また、こうした取り組みの積み重ねが、単元を通して見たときの「学習する前の自分」と「学習を終えた後の自分」の変容を自覚することにもつながり、自らを問い直すきっかけにもなるのではないかと考える。

そこで、今年度は、活用を意図した学習履歴の掲示にも取り組んでいく。単なる学びの足跡としてではなく、習得した知識や技能を意図的に活用させる場を設定し、そこで必要となる知識や技能を意図的に掲示として残していくのである。視点Aの「知識の構造図」や視点Bの単元構成ともリンクさせながら、実際の学習の中で子どもたちが掲示してある学習履歴と比較したりつなげたりしながら学びを深め、その深まりに気づくことができるようにしていきたい。